

藻岩山の歴史

大 昔は火山

今から約五百万年〜三百万年前、札幌南西部で大きな火山活動があり、西野層という地層ができました。その後さらになる火山活動が起こると、この地層にマグマが貫いて入り、地表に何回も溶岩が噴出し、藻岩山が形造られたと考えられています。

大昔は、藻岩山はれっきとした火山だったのです。しかし、最後の火山活動後約二百万年を経過し、雨風で侵食され火山らしくなくなり、今では火山と呼びません。

藻 岩山は円山だった？

「モイワ」というのはアイヌ語で「小さい山」を意味し、もともとは現在の円山を指す地名でした。一方、藻岩山はアイヌ語で「インカルシペ」（「いつもそこに上って見張りをするとこころ」の意）と呼ばれていました。ところが、明治初期に「モイワ」に「円山」という新たな名が付くと

「インカルシペ」に「モイワ」の名が転化され、定着してきました。

伐 採をまぬがれた

藻岩山が記録に登場するのは幕末〜明治時代初期。このころ札幌の街には開拓使吏員や農業移民、屯田兵の入植、さらにはこれらに伴って建設業者や商工業者が次第に定住し、人口が急増しました。

これらの移住者の住居用や冬の寒さをしのぐための薪用、公共事業用として、多くの木材が必要になりました。

しかし開拓使では、木材の伐採が無秩序に行われることは、環境の荒廃を招くとの判断から、明治四年にイチイやハリギリ、エゾヤマザクラ、カツラ、トドマツなどの伐採を禁止、明治六年には札幌周辺に「官林」を定めて森林の保護に当たりました。

藻岩山は特に自然の風致が優れているため、官林の中でも禁伐林に編入され、全ての樹木が守られました。

天 然記念物の指定へ

明治十五年に開拓使が廃止され、三県時代を経て北海道庁の時代になると、藻岩山の禁伐採の扱いが緩和され、ある程度の伐採は許されるようになっていきました。藻岩山の森林の貴重さが見直されるきっかけとなったのは、明治二十五年に日本を訪れたアメリカの樹木学者、サージェント教授の影響が大きいと言われています。同教授は「日本森林植物誌」（英文）で藻岩山の森林について触れ、この山と同じような気候の土地、しかも狭い地域に、これほど樹木の種類が多くあるところは、世界的にも珍しいと述べました。

伐採でこの貴重な原始林が次第に減少していくことを懸念した道庁では、明治の末から大正の初めにかけて、北海道の代表的な原始林を保存することを検討し始めました。その結果、藻岩山は大正二年から四年にかけて選定された全道十一カ所の原生天然保存林に加えられました。そして、大正八年に国の天然記念物保

レ クリエーションの場として

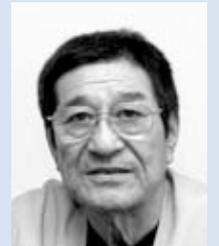
存制度が成立すると、藻岩原始林は大正十年に北海道における第一号の天然記念物に指定され、いっそうの自然保護が図られるようになりました。

藻岩山は明治時代に札幌を訪れた外国人から、絶好の登山の地として親しまれました。一方、札幌市民は藻岩山に対して宗教的なよりどころを求め、明治二十二年に西国三十三カ所の霊場にちなんで、登山道沿いに三十三観音を設けました。これらの石仏ができてから登山者が急増。藻岩山はもともと本格的な登山の対象となるほど険しい高山ではないので、明治末期から小学生の学校登山にも盛んに利用されるようになりました。昭和三十三年には、ロープウェイや観光自動車道路が整備され、山頂からの眺望を気軽に楽しめるようになりました。また、同年十二月にはスキー場がオープン。市内中心部から約十キロメートルという立地の良さもあり、現在まで多くの市民でにぎわっています。

藻岩山の自然を守るために

昭和40年ころから藻岩下に住んでいる則川さんは、6年前から藻岩下連合町内会の衛生部長に就き、南区クリーンさっぽろ衛生推進協議会理事も務めています。日ごろ散歩や買い物に行く時には、近所の公園のごみ拾いをするよう心掛けています。

同連合町内会では、毎年、藻岩山の雪解けに合わせ、登山を兼ねた清掃活動を行っています。則川さんは「ほとんどの登山者はきちんとごみを持ち帰っていると思いますが、一部の人が捨てたごみで、山が汚れてしまいます。藻岩山の魅力は札幌全体を見渡せる展望台や、夏は登山、冬はスキーと一年中楽しめるところだと思います。都心の近くでこれほどの自然があるところはなかなかないと思いますので、大切にしたいですね」と身近な自然の大切さを熱心に語ります。



藻岩下連合町内会
則川 義博さん